ドイツ・トリアーにおける遺跡の保存と活用

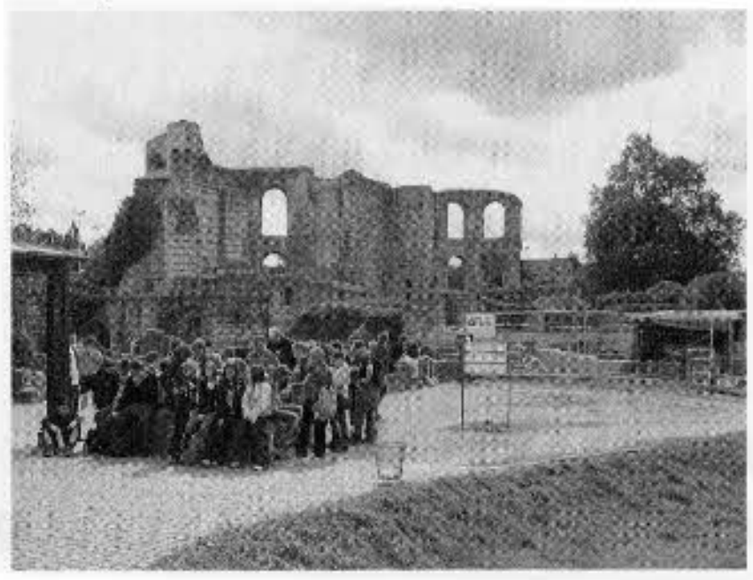

図22　カイザーズテルメン遺跡

トリアーの歴史の概要　ドイツ西部ラインプファルツ州の州都トリアーは、ルクセンブルグとの国境近く、フランス国境からも約50kmの距離に位置する。人口は約10万人。現在は一地方都市に過ぎないこの町は、BC15年頃にローマ皇帝アウグストゥスがライン川西岸地方の統治拠点としたことから、帝政ローマ時代を通じて現在のドイツで最大の都市であった。2世紀後半になると、この地方のローマ帝国の経営に対してゲルマン人の脅威が増大、その侵攻を防ぐため、AD180年頃には周囲に延長約6.4kmに及ぶ城壁が廻らされた。3世紀後半の一時期ゲルマン人により攻略されたものの、奪還後の復興が進んだコンスタンティヌス大帝統治下の4世紀初頭にはアルプス以北のキリスト教布教の拠点となって繁栄。同世紀には人口が6～8万人を数えた。西ローマ帝国が滅亡した5世紀末には人口が激減し衰亡。トリアー司教が大司教となった802年からは一時的に隆盛の気配を見せたものの、9世紀末にはヴァイキングによる破壊を被った。その後は徐々に復興し、14世紀には人口1万2千人まで回復、トリアー大司教は選帝侯の地位を得ることとなった。16世紀になると、織物業者たちが宗教改革を導入しようとしたが失敗して町から流出、このため都市の勢力は衰退した。17世紀前半の独仏間の30年戦争から18世紀初頭にかけては、フランス軍による包囲、占領、破壊が繰り返された。18世紀半ばにようやく落ち着きを取り戻し、バロック様式やロココ様式の教会・広場・庭園などが築造された。1794年にはフランス革命軍により占領、続いてフランスに併合された。1815年のナポレオン敗北後、プロシア領となる。第一次世界大戦では50回の爆撃を受け、戦後はフランス軍の進駐を受けた。さらに、第二次世界大戦では市街地の40%が破壊され、戦後の復興も遅々として進まなかった。しかし、復興時期の遅れがかえって歴史的遺産に対する意識の高まりと合致し、遺跡や歴史的建造物の修復や再建といった事業が積極的におこなわれ、二千年に及ぶ遺跡と歴史的建造物のショーケースと言われるようになった。これらのうち重要なものは州法によって保護の対象となり、さらに「トリアーのローマ遺跡、大聖堂、リープフラウエン教会」が世界遺産に登録されている。

ローマ時代遺跡の発掘　トリアーでは、ポルタ・ニグラが度重なる改修を受けながらも地上に残存していたのをはじめ、一時期は石切場となっていたアンフィシアター（円形劇場）や中世には一部が城壁として使用されていたカイザーズテルメン（皇帝浴場）など多くのローマ時代遺跡が人々の認識のもとにあった。これらローマ時代の遺跡の発掘調査が実施されるようになったのは、プロシア領になった19世紀のことである。これは、フランス併合期間を経たトリアーをその領土におさめたプロシアが国民国家として独自の歴史の拠り所のひとつを古代の遺跡に求めようとする行為であったと言えよう。その後も発掘調査は継続的におこなわれ、第二次世界大戦後は発掘調査に引き続く整備も積極的におこなわれるようになった。1987年には市街地中心部の開発事業で浴場跡（旧家畜市場のテルメン遺跡）が発見され、トリアー博物館によって全面発掘の後、保存整備が図られるなど、遺跡を組み込んだ街づくりもおこなわれている。

ローマ時代遺跡とその整備・活用　カイザーズテルメン遺跡は、4世紀初頭に築造された大浴場の遺跡（図22）。温浴場、冷水浴場、高温浴室、休憩室、作業用地下廊下、コートヤードなどで構成され、おもにレンガで築造された遺構の遺存状況も良好である。遺構整備手法は、基本的に遺構の屋外露出展示であるが、残存遺構の直上に新たな想定復元を付加している部分もある。遺跡はおもに観光資源・学習資源として活用されている。

バルバラテルメン遺跡は、AD150年頃の築造と考えられる浴場の遺跡。現在も発掘調査が継続的におこなわれている。遺構の残存状況は良好で、とくに2つの大型冷水浴場はこの遺跡の大きな特徴となっている。遺構整備手法は、遺構の屋外露出展示とそのための修復であり、カイザーズテルメン遺跡に見られるような想定復元の付加はおこなわれていない。観光資源・学習資源として活用されているが、研究資源としての側面も強い。

ポルタ・ニグラは、AD180年頃、ゲルマン人の侵攻を防ぐため築かれた城壁の北門。アルプス以北に残存するローマ時代の城門では最大のもの。11世紀に教会に転用

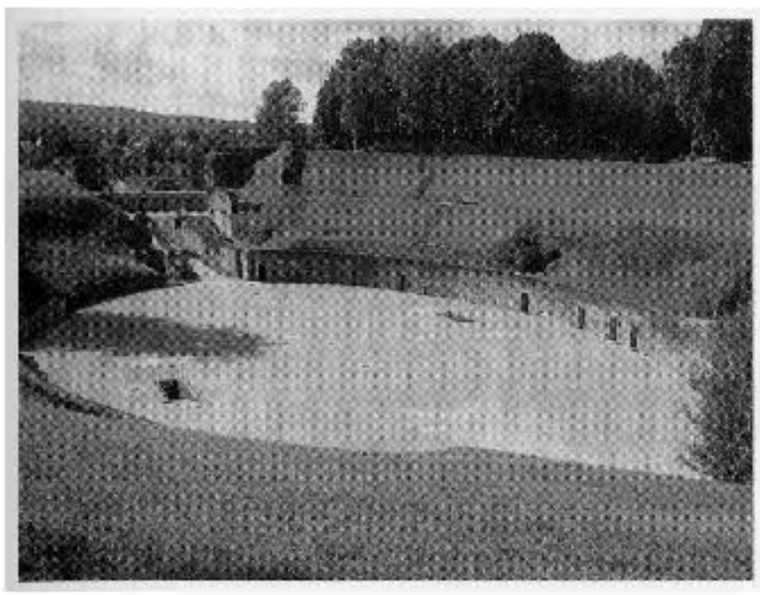

図23　アンフィシアター遺跡

図24　旧家畜市場のテルメン遺跡

図25　観光者で賑うトリアー市街

されたため、破壊を免れた。教会として使われた期間、建物には幾多の改修が加えられたが、19世紀初頭トリアーを統治下においたナポレオンによってそうした後世の改修部分の多くが除去された。ポルタ・ニグラは「黒い門」を意味し、その名は石材が風化により黒色となった外観に由来する。トリアーの歴史を象徴する建造物であり、観光資源・学習資源として活用されている。

アンフィシアター遺跡は、AD100年頃の築造（図23）。当時の観客収容数は約１万８千人と想定され、各地に現存する約70箇所の同種の円形劇場のなかで10番目程度の規模である。丘陵の裾部を利用した構造で、東側観客席は丘陵地形を整形して利用しており、現在はブドウ畑となっている東方の丘陵斜面とあいまって優れた景観を見せる。中世の一時期には石切場となったこともあったが、闘技場周囲の壁に面する闘技動物房や闘技場の地下室及び地下排水施設が残るなど、全体的に保存状況は良好である。部分的に修復を加えた露出展示であるが、観客席は遺構上に盛土を施し、植栽を交えた芝生斜面として整備されている。観光資源・学習資源として活用されており、その本来的な空間的特質を活かし「古代祭典」やコンサートの会場としても用いられている。

旧家畜市場のテルメン遺跡は、３～４世紀に市民が利用した浴場（図24）。13世紀には教会建築のための石切場となって地上遺構を喪失。17～18世紀には修道院の庭園の敷地となり、19世紀初頭には家畜市場となった。1987年に開発事業で地下遺構が発見され、以後1994年までトリアー博物館が全面発掘調査を実施。遺構は、現代的なガラス張り建物の内部で露出展示されている。この建物は遺構の保存・展示と遺構覆土上に新設した床面での各種催事機能の共存を目的にしたものといえる。柱等の構造材を遺構面に打込んでいる点では部分的な遺構の破壊を伴う整備とも言えるが、一方で遺構が常時公開されている利点も決して小さくない。市街地における地下遺構の整備手法を考えるうえで議論を呼ぶ事例と言える。

観光地としてのトリアー　トリアーを訪れる観光者は年間約300万人にのぼり、観光が主要産業のひとつとなっている（図25）。ドイツ国内はもとより、ヨーロッパ各地やアメリカなどからの多数の観光者が訪れる。トリアーは前大戦で甚大な損害を被ったが、その復興にあたっては遺跡・歴史的建造物・町並みの修復や再建が積極的におこなわれた。ドイツでは第二次大戦後の復興が同様におこなわれた都市が相当数見られるが、トリアーはそれらのなかでも観光地としての人気が高い。これはローマ時代の遺跡をはじめ中世の建造物などが多数、良好な状態で保存・修復・公開されていることが大きな要因であり、こうした遺跡や歴史的建造物が観光資源の中核として重要な役割を果たすことを示している。

観光地としての成否は、観光資源や観光施設の良否のみならず、情報提供やホスピタリティーといったソフト部分によるところが大きい。トリアーでの観光者に対する情報提供に着目すると、ポルタ・ニグラ近くのインフォメーションセンターが重要な役割を果たしている。インフォメーションセンターで受け付ける有料ガイドツアーのうち標準コースのものは、移動手段として徒歩かバスが選択できる。また、テーマ別のガイドツアーとしては、ローマ時代遺跡、中世の歴史など10種類以上が用意され、さらにワインテイスティングやサイクリングなど観光者の様々な需要にこたえるメニューが用意されている。また、これらのツアーは独語のほか、英・仏語などの外国語でも対応している。ツアーに参加せずローマ時代の遺跡を訪問する観光者には便利で経済的な共通入場券が用意されており、また個別の入場料にも子供料金や団体料金のほか年金生活者・学生・障害者・家族などのきめ細かい割引料金が設定されている。不特定多数への情報発信という点では、独語のほか、英・仏・蘭・伊・露語に対応したトリアー市のウェブサイトの充実があげられる。宿泊や買物、催事情報のほか、各観光資源についての情報が、概要・入場時間・入場料・バス情報・歴史等の詳細・地図・関連書籍の７項目で提供されている。これらの情報は適宜画像を含み、アンフィシアター遺跡などでは臨場感のある360度のパノラマ動画も提供されている。また、誰でも無料で送付できるＥメール絵葉書も、宣伝・広報効果をもつ新たな手法として注目される。

（**小野健吉**／文化庁記念物課・**内田和伸**）